

BRUTUS®

Casa

2009 vol.112
JULY
定価 880円

7

建築家が教える「環境」の授業2 植物と暮らそう!

せんせい☆妹島和世／ニコラス・グリムショー／パトリック・ブラン etc.

植物マニアのインテリア大公開!
国分太一、ホンマタカシほか。



世界のデザイナーに聞いた、
本当に優しい「環境プロダクト」とは?

ミラノサローネ2009速報!



コンポスター 上のフタを開けて野菜くずなどを入れ、下のハッチから出来上がった堆肥を取り出す仕組み。底はなく、地面の上に直接置くため、ミミズが勝手に上がってきて、仕事をしてくれる。“Galvanised Composter”でサーチを。35ポンド前後。

数年前から有機野菜の宅配制度を利用していますが、土のついた野菜の皮などをゴミに出すのはもったいない気がして、裏庭にこのブリキのバケツを逆さにしたようなコンポスターを置くようになりました。野菜くずや無漂白の紙などをちぎってこの容器に入れておくと、ミミズとバクテリアの力で7か月〜8か月後には栄養価の高い堆肥に分解するというものです。

冬の間はなかなか分解が進まないのですが、外気温が上がるにつれ分解速度がアップし、中身がどんどん減っていくんです。最終的には75分の1の容量の堆肥に変わるとか。これは本当に画期的です。なにしろ使い始めて普通に出すゴミの量が4分の1に減りましたから。出来上がった堆肥でトマトを育てたりして、自然の循環システムの素晴らしさを再認識しています。



Tomoko Azumi

安積朋子 1966年広島県生まれ。1995年よりロンドンをベースに活動。安積伸とのユニットで国際的評価を確立後、2005年に(t.n.a. design studio)を設立。使い手と作り手の双方の生活の向上を考えながら創作活動を展開中。http://www.tnadesignstudio.co.uk

“ミミズやバクテリアの力だけで、野菜くずや紙が堆肥になるんです”

ブリキのコンポスター

“素直に持ちたいと思わせるところが一番スゴイ!”

自分でも作れる《四万十川新聞バッグ》



Yuuki Kumagai

熊谷有記 1978年香川県生まれ。2005年レーベルクリエイターズ入社。素材から新しいものづくりを考える「MATE-RE-INNO」シリーズの開発を手がけるほか、高知の森づくりを応援する「more Trees」にも参加している。http://www.label-creators.com

仕事で出かけた、高知県の四万十。何げなく立ち寄った十和の道の駅で見つけたのが、この《四万十川新聞バッグ》でした。見た瞬間に、「かわいい!」と思って、手に取りました。500mlのペットボトルを3本入れても大丈夫だから、強度もバッチリですよ。

さらに、この洗練されたパッケージングは、高知在住で、地元の魅力を発信し続けるグラフィックデザイナー、梅原真さんによるものですが、バッグの開発は、「伊藤さん」という地元の“おばちゃん”によるもの。素材に地元の新聞が使われているのも魅力的ですし、作り方の説明書付きで、後々自分でも実践できるようになっている。でも、何よりも素直に持ちたい、飾りたいって思わせるところが一番スゴイって感じます。



四万十川新聞バッグ 古新聞をレジバッグ代わりにしようという活動から生まれた、新聞紙古紙リサイクルバッグ。通販も可能でサイズやタイプ違いも揃う。作り方の「レシピ」付きで1,000円〜。http://shimanto-tennen.com/shinbun_s.html